

イノベーション地域経済社会シリコンバレーと深圳の類似性：イノベーションドライバーを探る

法政大学地域研究センター 客員教授 小門 裕幸

激震。迷走。今まさにただならぬ時代に突入しています。2024年7月恩師清成忠男先生が逝去されました。先生はシリコンバレー調査を企画し、その成果として1997年5月『日本型産業集積の未来像』を編纂、日経新聞社から出版。世に日本のあり方を問いました。その書で取り上げたシリコンバレーは予想通りICT革命の主役となり世界を牽引していくこととなります。当時よりシリコンバレーでその一翼を担っていたのは、台湾・香港・中国本土から人生を賭して米国の地を踏んでいた留学生たち。

その後、改革開放が本格化するなかで彼ら華人集団は瞬間に深圳に第二のシリコンバレーを登場させました。本稿は、先生のアルペン地域に発したその先駆的な産業集積論、そしてその駆動力としてのベンチャービジネス論を継承し、産業集積地域としてはベルエポックを現出した1990年代後半から2010年代のシリコンバレーと2010年代後半の深圳地域社会についての出張報告として、記録に留めるものであります。そして、改めて先生のご業績に敬意を表し、ご冥福を祈るものであります。

はじめに

(イノベーション地域社会モデルとしてのシリコンバレーと深圳、その偉大性と異形性)

技術革命の加速が社会のイノベーションを強く求めている。そのスピードを糧にしてアジャイルに生きていく人材を多様に集め活躍の場を与えることができる地域社会が優位である。リチャード・フロリダは3T、Technology/Talent/ Toleranceという言葉でそれを表現して見せた。その典型がシリコンバレーである。後発の中国深圳にも同様の事態が起きている。

そもそも米国は欧州近代が求めた自由の新天地を創成したところだ。その米国に自由の新天地シリコンバレーは登場する。息苦しさには耐えかねた東海岸の人々が移動する。シリコンバレーは新たな究極の自由の新天地となっていく。1990年代の米国は双子の赤字（財政/経常収支）で国家存亡の危機にあった。シリコンバレーも地域空洞化の真ただ中、しかし地域の企業・アカデミア・政界そして市民が一体となってその未曾有の危機を克服する。世界の人材をも圧倒的強さで吸引してイノベーションを突き進む。同時に、時の新政権候補者である若きクリントン/ゴアを見出し支援しうねりをつくり、当選後は速やかに情報スーパーハイウェイ構想を提案する。スーパーハイウェイは瞬間に実現、そして米国はICT革命の旗手として世界の盟主に返り咲くことになった。その原動力はシリコンバレーにあった。偉大なる凄まじさといっ

てよい。

他方、2018年2月、改革開放40年の大国中国の南東の地、深圳を、シリコンバレー調査の延長で初めて訪

問した。政治社会システムが対極にあるその地に、シリコンバレー社会と共通するものを感じ取った。鄧小平(1904-1997)が憲法を改正して社会主義市場経済(1992)と明言した実験の場である。米国の自由主義経済とは対極にある。その深圳でシリコンバレーと見まごう凄まじい社会の変容とその異形さに驚愕した。

本稿は、市中で氾濫するアントレプレナーシップとイノベーションという概念について学術的に整理した上で、今次2018、2019年の中国深圳の現地調査の報告を兼ね、イノベーションの地であるシリコンバレーと深圳の比較分析に臨みたい。本稿が、東洋人たる日本人にとって一条の光があるとすれば、異なる文化・文明を背景にする深圳にシリコンバレーとの類似性と共通点が多々みられることである。何かヒントがつかめないか期待している。

目次

I、イノベーションとアントレプレナーシップ

- 1) イノベーションとは
- 2) イノベーションの発見
- 3) 認知が遅れる経済学における起業家/企業家（以下企業家に統一）の存在
そしてアントレプレナーシップという人間の本源的行動原理（基本機能）
- 4) 米国の戦後の経済社会革命を演じた企業家、
そしてイノベーションとアントレプレナーシップという思想
—ドロッカーのイノベーション経営学—

II、深圳社会とシリコンバレー社会の類似性

- 1) 二つの文明 二つの政治経済システム
- 2) シリコンバレーと深圳社会の概要
- 3) 地域社会の基本認識 (諸科学の視点)
- 4) 両地域の類似点

Ⅲ、イノベーションを生み出す社会の構造

Ⅳ、日本・日本人について

Ⅴ、課題

I、イノベーションとアントレプレナーシップ

1) イノベーションとは

イノベーションという言葉が日本でも社会に膾炙したようだ。イノベティブという形容詞としても使われるようになっていく。イノベーションとは、新機軸・革新と辞書にはある。技術的な言葉ではなく経済的あるいは社会的なものである。二十世紀の経営学の泰斗ドラッカーは、「それは技術ではない。経済や社会のコンセプトであって、技術の発見・発明よりはるかに重要なものである」と明言。ダボス会議の創始者でありインダストリ4.0の命名者である、高名なる未来学者クラウス・シュワブ(1938～)もイノベーションは複雑な社会プロセスであると指摘している¹⁾。

2) イノベーションの発見

(経済学とイノベーションという概念)

経済学は、産業革命が産声を上げるころスコットランドの哲学者アダム・スミスをその父としモラルサイエンスとして誕生した。現在、一大学問分野に成長している。その主流派の経済学は、もっぱら経済の安定・均衡のメカニズムに重心が置かれていた。静態的分析と呼ばれるものである。

経済学におけるイノベーションという概念の認知は遅い。20世紀の初頭である。それは、西欧ではパリ・コンミュンの混乱を経たバルエポックと呼ばれるつかの間の時代。あだ花のように文化が花開き資本主義がしばしのよき時代を迎えていた時である。産業革命で力を蓄えた列強が帝国主義を進行させていたころといつてよい。そして、大西洋の海の向こうでは、南北戦争を終えたアメリカが資本主義をフル稼働で発展させ経済大国に名乗りをあげんとしていた。しがらみのない自由で競争的な経済風土の中で資本主義をダイナミックに展開していた。破竹の勢いで経済大国を目指していた時代だ。イノベーションはやはりアメリカを抜きには考えられない。オーストリア学派のヨーゼフ・シュンペーター(1883-1950)はアメリカから大いなる刺激を受けていたに違いない。動態的な経済に資本主義の本質を見ていたのである。

(経済のダイナミズムとイノベーション)

1912年彼は『経済発展の理論』を著す。イノベーション(新結合)という言葉をそこで初めて使った。経済学の中で定義したのである²⁾。彼は同じくオーストリア学派のワルラス(1834-1910)の完全競争下の一般均衡理論に傾注するがゆえに、経済に内在するイノベーションという力が均衡を破壊し、その均衡破壊力に経済発展の源泉があると確信し、経済理論を展開する。古典派・新古典派が経済発展を外発的要因(外生要因)によるとして退けていたものを、経済学の表舞台に引き上げようとした。経済はダイナミックに変化する。不均衡が常態であり、それこそが健全であるとした(norm of healthy economy)。この発想はマルクスの認識する経済文脈に沿ったもので決して新規性のあるものではなかった。彼自身もそのことを『経済発展の理論』邦訳の前書きにて告白している。

(シュンペーターの新結合)

シュンペーターは、イノベーションは供給者側から行うものであり、そして均衡破壊が非連続で急激に行われる様を創造的破壊という言葉で鮮やかに飾って見せた³⁾。そしてこの新結合を五つに分類した。

- i 新しい財貨の生産(プロダクション・イノベーション)
消費者の間でまだ知られていない財貨、あるいは新しい品質の財貨の生産
- ii 新しい生産方法の導入(プロセス・イノベーション)
当該産業部門において実際上未知な生産方法の導入
- iii 新しい販路の開拓(マーケット・イノベーション)
当該産業部門が従来参加していなかった市場の開拓
- iv 原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得(サプライチェーン・イノベーション)
既存のもの 知らなかったもの、不可能だったものを問わない
- v 新しい組織の実現(オルガニゼーション・イノベーション)
独占的地位の打破など

イノベーションはシュンペーターの経済学への挑戦だったのである。

(イノベーション研究は米国で:カーズナーの学び)

イノベーションについてはオーストリア学派のイスラエル・カーズナー(1930-)を紹介しておかないといけない。彼は、戦後研究拠点をイギリスから米国ニューヨークに移し、絶頂期の米国経済を過ごす。彼は均衡破壊ではなく、均衡への接近推進がイノベーションであるとす。千変万化し躍動する経済現象に触れる中で、経済均衡に向かう「市場プロセス」に照準を当て、そのプロセスを推進することもイノベーションであると定義している。小規模でも改善を重ねるなかにイノベーションを見

出したのである。躍動し激変し、時に断絶する米国経済の真ただ中においてそう結論している。

3) 認知が遅れる経済学における企業家の存在、そしてアントレプレナーシップという人間としての本源的行動原理（基本機能）

（古典派経済学とアントレプレナーシップ）

古典派・新古典派の経済学には企業家は表に出てこない。経済を動かす個については一様に合理的経済人と措定して理論構築を行っている。人間中心の議論を展開するのはオーストリア学派である。

（アントレプレナーシップは人間学のオーストリア学派）

まずは既述シュンペータである。彼は経済均衡を打ち破り経済を発展させる企業家という強い個の存在を主張する。それは、受け身で日常生活に埋もれる古典派・新古典派の合理的経済人ではない。企業家は洞察力をもって静態の世界を打ち破るアクティブで強い意思を持つ人間である。彼は、資本主義が色あせ混迷する西欧社会に、神をも畏れぬ強い経済主体として登場させる。その発想は、哲学者ニーチェ（1844 - 1900）の超人と相通じるものがある。事実彼はニーチェの影響をうけていたのではないかといわれる（森嶋通夫『思想としての近代経済学』岩波新書1994）。シュンペータの企業家は均衡を破壊するために登場し、使命を終えると速やかに退場する爽やかな超人なのである。

（オーストラリア学派の米国への移動）

20世紀の後半オーストリア学派の活動拠点は米国に移る。オーストリア学派のミーゼス（1881 - 1973）も1940年に米国に亡命する。暗澹たる生活を余儀なくされた大戦前の欧州とは全く違う米国の明るく深淵とした逞しい自由主義思想に感化される中で、1949年『ヒューマン・アクション』を著す。その中で、人間の本源的行動原理としてのアントレプレナーシップ⁴の重要性を主張する。人は未来を予見できないという不安定な状況のなかで意思決定する。その時、人間の本源的な行為であるアントレプレナーシップが発現すると指摘する。この感覚は人間が決意するとき、その積極性の背景にあるのは自生的楽観であるとするケインズ（1883 - 1946）の主張とも通じるものがある。ケインズは、活動を欲する自生的衝動、つまり血気（アニマル・スピリッツ）の必要性を感じ取り、それが鈍ると企業の衰退につながると、経済活動の本質をつく発言をしている。彼もアントレプレナーシップの重要性を理解している。また、制度学派の創始者といわれ、進化経済学を発展させたソースティン・ヴェブレン（1857 - 1929）も経済行動は個人的動機では決してなく人間の本能であるとして、進歩の原動

力としての本能を分類する。競争本能（emulation）、純粋な好奇心（pure curiosity）そして衝動的な職人気質（workmanship）などの重要性を主張する。

ミーゼスがニューヨーク大学で教鞭をとっていた時代の愛弟子が、カーズナーである。カーズナーは、自由で明るいアメリカでアメリカンドリームを抱いて青春を過ごしたのであろう。想像に難くない。多くのビジネスマンに接したのであろう。チャレンジ精神旺盛な実践的な企業家像を描き出す。千変万化の経済の諸局面に俊敏に動き回り問題解決を図る人々の行動力の重要性を指摘したのである。その行動力がアントレプレナーシップである。カーズナーは、企業家を「すでに存在し気付かれるのを待っている諸機会に対して機敏であるもの」と定義している。シュンペータの利潤機会の創造に対して、カーズナーは利潤機会の俊敏なる把握力を重視する。

（19世紀経済学とアントレプレナー）

もちろん、高名な経済学者も彼らの経済学の体系には組み込まなかったが、企業家的存在は了知している。スミス（1723 - 1790）⁵ やリカード（1772 - 1823）の時代は、冒険資本家の時代で資本家と企業家の峻別がされない。株式会社制度が普及する中で、ミル（1806 - 1873）とマーシャル（1842 - 1924）は企業家的役割を認識しundertakerというアントレプレナーの英語を使用するが、その存在感は希薄である。企業家は利子・利潤を食む悪しき存在となお映っていたのか、モラルサイエンスの色彩の強い古典派的経済学の中では影が薄い。

（米国中等学校教科書でのアントレプレナーの認知）

もう一点、遅ればせながら、教育分野でも企業家認知が行われていることを指摘しておかないといけない。米国の中学高等学校の経済学（近代経済学）の教科書が改訂されて企業家が登場する。従来は生産の三要素（土地、労働力、資本）として教えられていたものが、企業家が20世紀が終わるころに新たに追加された。生産は土地、労働力、資本が重要な三要素であるが、それらを駆動する四つ目の要素である企業家が必須となった。

4) 米国の戦後の経済社会革命を演じた企業家、そしてイノベーションとアントレプレナーシップという思想—ドラッカーのイノベーション経営学—

（イノベーション発見者としてのドラッカー）

シュンペータによって発見されたイノベーションという概念は、ピータ・ドラッカー（1909 - 2005）により実践に裨益する知識体系に組み立てられる。ドラッカーがイノベーションの発明者（坂本和一）と呼ばれる所以である。

ドラッカーはウィーン生まれのユダヤ系オーストリア人で、彼の家には政府の高官 / 弁護士であった父親の関

係で高名なるシュンペーター、ハイエク（1899 - 1992）、ミーゼス（1881 - 1973）などが出入りしていた。ドラッカーは幼少期より彼らと面識をもつ。そして、とりわけ、シュンペーターから大いなる影響を受けたと語っている。

大恐慌の時代だ。ドラッカーはドイツで就職、新聞記者となるが、ナチスが台頭する中で身の危険を感じてロンドンに逃れる。そして、その後米国に移住する。ロンドン滞在時ケインズの講義を聴く機会を得ている。その時、彼の関心がモノでなく人々の行動にあることを確信したと本人が語っている（本人は社会生態学者と称す）。彼は教職につくが、企業コンサルタントとして、とりわけ長期わたり米国を代表する大企業GMにかかわり現場実践型の学者として活躍し、マネジメントという概念を確立し、それらを知識体系としてまとめ上げ、さらに、マネジメントという考え方を組織規模・NPO・行政府という異なる機関、また業態に関係なく、米国社会全般に広く深く普及・浸透させた。現代経営学の祖といわれる所以である。さらに、彼のホリスティックな哲学的・社会学的・人類学的な思考が近未来を言い当てることにつながった。晩年は未来学者ともいわれた。

（企業の機能と企業家の重要性）

彼は、企業を個人所有権に基づく収益手段ではない、現代産業社会を駆動する経済成果機能・組織機能・社会機能を有するかけがいのない器官であるとし、その倫理性に経営権限の正当性を見出す。それを踏まえ、企業の目的は顧客の創造であるとして、そのための基本機能としてマーケティングとイノベーションの二つを掲げる。そして、1964年米国経済が減速・停滞するなかで『断絶の時代』を著し、イノベーションの重要性を指摘する。彼は第一次大戦以前の50年を発明の時代として企業家の活躍を指摘する。そして戦後に至り、企業家精神を強調すべき企業家の時代が再来したと述べている。彼の企業家の定義は、資源を新たに富の生産に振り向ける能力のある人材であり（somebody who endows resources with new wealth-producing capacity）、具体的には変化を探索し、機会を発見し機会ととらえ最大限利用する人材とする。カーズナーと同様な考え方をもっていた。

（イノベーションと七つの機会）

彼は、イノベーションは新しい価値と新しい顧客満足の創造と定義する。そしてイノベーションを実践するための論点⁶を指摘し、イノベーションのためのマネジメント（組織の作り方・組織の独立性・高い目標・新規事業誕生）を検討し、そして、七つの機会を詳述した⁷。

- i 予期せぬことの生起
- ii ギャップの存在
- iii ニーズの存在
- iv 産業構造の変化

v 人口構造の変化

vi 認識の変化

vii 新しい知識の出現、である。

（米国の1970後半～1980年代半の若者革命）

なお、ドラッカーは、停滞期に入った米国について1970年代後半から1980年代半にかけて、心理的文化的大革命があったことを指摘している⁸。その大革命は、大企業中心社会から中堅中小企業中心の社会、マネージャ中心の社会から企業家中心の社会に変容を遂げたことであり、そしてそれが歴史的な雇用増を生み出したという。しかも、その背景にベトナム反戦運動があり、若者の態度・価値観・野心に大きな変化があり、それが社会のうねりを生み出したというのである。

（まとめ）

イノベーションとは技術ではない。経済や社会を容れさせるコンセプトである（ドラッカー）。言い換えると、イノベーションは社会や経済を動かすアイデアであり原理（principle）である。経済の安定性や均衡を扱う古典派経済学に対し、オーストリア学派は経済均衡の破壊にこそ経済発展の源泉があり、それを生み出すものが企業・社会においてはイノベーションであり、個においてはアントレプレナーシップである（シュンペーター）とした。経済は千変万化する。経済均衡に向かう力強い動きもある（カーズナー）。これももちろんイノベーションやアントレプレナーシップが関与する。アクティブで強い意志を持ち、未来を切り開く人間がアントレプレナーであり、そしてその行為は人間の本源的なものである（ミーゼス）。ドラッカーは、経営学的な視点から、「時代は企業家の時代である」と評した上で、新しい価値と新しい顧客満足の創造こそがイノベーションだと定義した。本稿のテーマ、シリコンバレーと深圳。この2つの地域経済社会はイノベーションにより価値の創造を実現しているところである。シリコンバレーと深圳をとりあげ分析する。

II、イノベーションの地としてのシリコンバレーと深圳、その類似性

1) 二つの文明、二つの政治経済システム

（自由主義市場経済と社会主義市場経済）

長らくシリコンバレーを研究していた私がシリコンバレーつながらで2018年2019年と続けて深圳を訪問する機会を得た。米国は欧米資本主義諸国を代表する国家である。資本主義には様々な定義があるが、一般的には私有財産制、経済的目的としての利潤と効用の最大化、市場の存在と価格システムなどにまとめられる。中国は、「緩やかな社会主義公有制を基礎としつつ、各経済主体間

の取引については市場原理を導入する」というもので、相応の私的所有権が与えられ、営利的経済活動が活発に行われており、資本主義のシステムが駆動しているといえる。憲法を改正して、「社会主義市場経済を發展させ」とその前文で謳いこみ、経済運営を行っている。

(米国の近代自由主義経済と中国の統制的功利主義経済)

この二つの地域社会、片やシリコンバレーは自由主義経済圏の雄、アメリカの西海岸の一地域社会であり、片や深圳市は、社会主義市場経済と称して国家資本主義の途を歩み始めた大国、中国の橋頭保として創設された一地域社会である。西洋文明と東洋文明、対極にある異文化・異文明の地で経済の花を開かせているのである。これら二つの不思議な世界の構造を理解することは世界の今後を占う上で重要だと思う。シリコンバレーの人々は個の自立に始まり社会革命、産業革命、そして独立戦争と近代を生きてきた人々の子孫であり、なお理想郷を目指し情熱を燃やしている。片や、深圳は近代とは異なる統制的功利主義の中に誕生した貨殖性の強い人々がハイテク産業地域をつくりあげたもので、私には疑似シリコンバレーを形成したように見える。少し詳しく見てみたい。

2) シリコンバレーと深圳社会概要

(シリコンバレー小史)

シリコンバレーはジャーナリストが命名したものの。そのような行政主体はない。豊かな農作物を育む豊穡の地で歓喜の谷と言われていた。1891年歴史の偶然から田舎大学スタンフォードが誕生し、1937年教え子を強引に地元に残し(ヒューレットパッカードの誕生)、1955年変わり者のノーベル賞学者が有能な人材を説得し集結させ半導体産業を興した。1970年東海岸のハイテク企業の雄、ゼロックスが自由で寛大な研究所を開設し(ゼロックスの悲劇：この研究所の知財(無償)に発するものが1990年代シリコンバレーのGDPの三分の一以上だったと伝えられる)、個性あふれる人、優秀な人々が集まる梁山泊となり、スティーブ・ジョブズ(1955-2011)のような個性あふれる人材を吸引するなど、そこには自由な人生を求めるフロンティア精神あふれる人々が集まってきたのである。日本的にいうと変な人の一大拠点ということかも知れない。

(深圳小史)

深圳は、1979年鄧小平の改革開放の発令を受け、特区に指定されたことを嚆矢とする(そもそも漁村、人口統計より始めたころ3万人程度、1970年30万人)。鄧小平の戦略的意思決定は新しい時代を待ちわびていた華南の人々を当地に糾合するところとなる。加えて利に聡い香港及び東アジアの華南地域の華僑の人々が堰を切ったように深圳に押し寄せることになる。世界の製造

業拠点としての歩みを始めるのである。その時代は社会主義経済圏の崩壊・グローバル化そしてデジタル化、加えて日本型製造業モデルの崩壊期と間断ない変化が訪れた時代にあたる。勤勉で低廉な労働力と華僑資本を受け入れて、i) 単純な下請けサプライヤー ii) コピーキャットと揶揄されながらも iii) OEM, ODM と呼ばれる新しいモノづくりの手法を生み出しつつ、iv) 技術力を磨き、遂には台湾の鴻海< foxcon >を筆頭とする EMS (Electric Manufacturing Service: アセンブリによるモノづくり)の一大拠点となり、そしてその後の賃金の暴騰を契機に中小企業は淘汰の荒波に晒されるが、v) IDH (independent-design-house)を情報の中核とする新しいサプライチェーン形態に創造的脱皮を果たし、競争力を高めモノづくりのシリコンバレーと呼ばれるまでに脱皮を繰り返しながら成長をしたのである。この間、彼らのネットワークは強かにシリコンバレーとつながり、デザインド・バイ・シリコンバレー&メイド・イン・深圳の時代を経て、2015年ごろには深圳は、デザインド・バイ&メイド・イン・深圳となり、ハードとソフトが融合した世界のイノベーション拠点になるまでに発展したのである。深圳は、この時代の、日本の製造業、とりわけエレクトロニクス産業の衰退の受け皿となり、Leap Frog しながらさらなる飛躍を見せるのである。改革開放40年、深圳は香港系華僑のアングロサクソン資本主義が滲み出すように華南の人々と一体となって社会主義市場経済圏を構築していったのである。人口は1320万人(2017年)にまで急膨している。因みに、面積(深圳1997km²東京2194km²)・人口(同1320万人1374万人)とも東京とほぼ同規模である。

なお、電子政策上成功だったのは、中国政府が GREAT FIRE WALL を敷設したことである。電子情報管理徹底の名のもとに米国のメガITを排除した。結果、杭州のアリババや深圳のテンセントというようなGAFAMに匹敵するメガテック企業を生み出すことになる。

3) 地域社会の捉え方 / 認識：基本計数と共通点

(地域の基本数学)

第一は、これらの地域についての基本数学である。両地域とも広域にわたり展開する高度なハイテク産業集積地である(シリコンバレー地域：人口56万人の小都市の連合体が中心、そこに人口百万人クラスのサンフランシスコやサンノゼも加わって、人口約4百万人、面積約4900km²、なお、深圳は一つの行政区)。産業集積地とは、特定の産業業態・産業において相互に結び付いた企業群と関連する諸機関からなる地理的に近接した集合体であり、これらの企業群と諸機関は、共通性と補完性によっ

て結ばれているところである（マイケル・ポータの定義を小生が微修正）。

（地域の経済社会という認識）

第二は、社会は人々によって創造されるという認識である。他動的に決まっていくのではなく主体的に作り上げていくものという点である。社会学でいう社会構築主義（social constructionism）の立場をとりたのである。シリコンバレーでは田舎のオレンジ畑が中小のハイテク都市コミュニティ群に変容する。深圳は元々は3万人にすぎない漁村から大都市に変貌する。その駆動力となったのは域外の地域から集まってくる人々のパワーであり、自由に活動するための社会環境を自らつくりインフラも整備されていったからであろう。社会主義国家に属す深圳市も地方政府は政策を民間に後追的に展開することが得策であると認めていた。

人々の力、つまり人間の関係性が現実をつくる。その社会は社会学者タルコット・パーソンズやニコラス・ルーマンが考察したように、社会は多次元・相互補完・相互浸透的なシステムであり、そこを生きる個は力強い。社会学的には個は自立しており内省化し脱構築し自己再構成するもの、言い換えると再帰的近代の個として考えている。

（人間と社会の関係性）

三つめは、人間と社会との関係性である。制度やそこに埋め込まれた人間の知の集積が地域インフラとなって人間の行為に影響する。制度学派的ものの見方をとる。マイケル・ポータも産業集積論で知識基盤経済でのクラスタ集積においては「経済活動は、動態的社会に埋め込まれた社会関係性の中で発揚する（情報の流れ、交換の態様、協働性、改善へのモチベーション）」とし、また都市学者のアナリー・サクセニアン（1954）も米国の東海岸のボストンと西海岸のシリコンバレーを比較研究した好著、『現代の二都物語』（1994年）で、埋め込まれた知識（Embedded knowledge）を、三つに分けて① local institutions（慣習・文化・制度）② industrial structure（産業構造：社会的分業、連携、ネットワーク）③ corporate organizations（企業組織：プリンシパル/エージェント関係、決定・執行、ガバナンス）とし、その重要性を指摘している。さらには、ドイツにおいても、1980年代に遡るが、ヘリゲル（Gary Herrigel）が南部のバーテンビュルテンブルグ州とノトライン・ヴェストファーレン州のルール地域に埋め込まれた（embedded）、様々な慣例（practices）・規則（rules）・制度（institutions）が、財・サービスの生産・管理のやり方を規定し総体として産業地域を機能させていると指摘している。埋め込まれた知識としての地域社会の秩序体系の重要性が示されている。ここではそれらの知識体

系が地域発展のインフラとして大きな役割を果たしているとする制度学派的な立場に立つ。

（交換原理）

第四は社会構造の基本概念についてである。競争原理ではなくてソーシャル物理学のいう交換原理を中核に据えている。また、アイデアや情報の伝播と人間行動について、それらを数理的に分析する同物理学の知見を利用させてもらっている。

（動態的時空間）

最後は、動態的時空間の問題である。イノベーションが絶え間なく生じる両地域の動態的時空間は複雑系理論に親和性が高い。複雑系というのは、開放性・非線形性・因子の適応性・因子の高エネルギー値（アジャイル性）・多様性の閾値・自己触媒集団の生成と共進化（競争と協力：相利共生）・自己組織性・自生的秩序・創発（部分総和が全体を越える）を特徴とする。要すれば、夥しい数の因子が、それぞれ自由にダイナミックに動き回り、離合集散を繰り返す中で、全体では自生的な秩序が形成されると同時に進化・成長・価値増殖が行われる。そのような系（時空間）で考えてみたいのである。ここは安心安定の秩序ある穏やかでゆったりまったりと時が流れるところではない。ICTの進化を先取りして行動する時間感覚に鋭い人々の世界である。そのような世界、そのような地域社会を考えたいのである。

4) 両地域社会の類似点

これらの諸科学の前提を置いて、シリコンバレーに長きにわたりかかわった私の経験/知見を基本にして、深圳現地企業・大学など（2018-2/6～2/9、2019-7/29～8/6）及中国人大学院留学生の聞き取り調査を踏まえつつ、両地域の類似点を抽出した。

シリコンバレー社会と深圳社会の類似点は次の七つの点に整理される。

- i 中央政府から遠い僻地：双方とも西の端、南東の端に位置し、それぞれ中央政府からは相当離れている（シリコンバレー約4千キロ、深圳約2千キロ）。
- ii 白地からのスタート：
シリコンバレーは既述の通り地中海式の温暖な土地で一面オレンジ畑が広がっていたという。それしかなかった。カリフォルニア州の田舎である。
深圳はそもそも人口3万人（1979年30万人）の寒村、太宗は漁民であった。
- iii 元気で行動的・アントレプレナーシップあふれる人々がおおい。：シリコンバレーは個人主義を生きる自律する近代人である。深圳は非団体的で自我があり自己主張の強い中国の伝統的な人たちが多い。
- iv 出入り自由のよそもの社会・よそもの文化：シリコ

ンバレーは全米から移動してきた人々、伝統社会化してしまった東海岸からの移住者も多い。深圳は資本主義を待ちわびていた華南地域から、また華僑関連の香港を中心とする人々が集まった。いづれも現在7割が域外の人々である。

v 伝統の中で蓄積されたビジネス慣行・トラスト手法 / トラスト制度の存在：西洋・東洋数千年の歴史の中で編みこまれたビジネスのやり方や人と人との信頼の構築のあり方などが知（ナレッジ）として埋め込まれている。

vi 線分的に高速で流れる時間観念：西洋人的な線分的な時間感覚をもちそのスピードはラット・イアやドッグイアと揶揄される。深圳の人々も時間を強く意識しシリコンバレーとのその速度で対抗心を燃やす。両地域ともムーアの原則の世界にいる。

vii 主体的に創り上げる仕事と人生：両地域とも雇用の流動性が高く、起業する人々が多く、シリコンバレーではフリーランサも多い。雇われない働き方に抵抗はなく、人生は主体的に自分が作っていくという意識が強い。

viii 世界を代表する文明国家：シリコンバレーはギリシャローマそして近代化革命の伝統を引きづく西洋文化の行き着く先、自由の新天地であり、深圳は4千年の歴史を誇る東洋文明に属す橋頭堡、今や実験国家の先端的実験地域である。

さらに詳しくみると、

i 中央政府から遠い僻地：双方とも西の端、南西の端に位置し、中央政府からは相当離れている。シリコンバレーに通い始めた1990年代初頭頃、スタンフォード元副学長・SRIの創業者から開口一番、当地は「away from the government,そして三つのOKがある」と聞かされた。東のハイテク集積地ボストンはワシントンDCに近く、政府との関係が深い。政府への依存体質は自主自立精神を薄弱にしている（アナリーサクセニアン）。三つのOKとは失敗（failure change）、転職（change job）競争相手との情報交換（talk to the competitor）である。シリコンバレーは、政府からの干渉もなく、自由で競争的な環境の中で、大企業中小企業の垣根が極めて低く、人材の流動性の高い情報伝達のスピードが早い。競争するが故に、競争するスピードが速い（技術進歩が高速）が故にか、協力関係が生じている。いわばシリコンバレー全体が一つの技術者地域共同体（ある種のコモンス）として存在するのである。従って独特の地域文化を形成することになったのである。

中国は、歴代一人の皇帝が統治する中央集権国家であるが、極めて巨大で広大で人々が多く多様な社会の連合体として存在しているといった方がよい。地域の末端ま

で中央政府の目が届かず、事実上、歴史的にも嘲笑うように地域は分権構造にある。地方に派遣された官僚（士大夫）は徴税・監督は地域の宗族統治に委ねていた。中国には「条」と「塊」という表現がある。条はピラミッド状の縦の行政系統を指し、塊とは面上の横の地域統治のことである。地域統治は基本「塊」である。毛沢東（1893-1976）（極端な集権化）後の鄧小平による改革開放（1978年～）はそれを促進しようとしたものである。当初国有企業に対して発令したスローガン「放権譲利」も地方のエネルギーを後押しすることになった。このような状況下、深圳は経済成長の優等生として、遠隔地という利点を生かしながら、大胆に地域経営が民間主体で自由度高く展開されることになる。

ii 白地からのスタート：

両地域とも大国の一地域であるが伝統社会のしがらみがなく規制のない新しい場、言ってみれば白地のキャンパスであった。このことが自由な経済活動に弾みをつけた。柔軟でモビリティの高い社会はグローバル化・ICT化に対処し、新たな時代が求める知識が終結することになり、世界の有能な人材が人材を呼ぶ形で成長していった。

なお、深圳は社会主義でありながら、白地であったがゆえに、民間先行 / 行政後追を実現することとなった。中央から派遣された役人は基本インフラは関与するが、ビジネス・産業は民間に任せた。彼らを巧みに操ることが経済成長につながり、それが行政手腕の評価につながった。官民相互補完的な地域マネジメントが奇しくも実現していったのである。地域でできることは地域で実行という補完性の原則（キリスト教倫理に由来する地方自治の原理でEU統合の理念となったもの）が結果的に貫徹されることとなった。

iii 強い個の存在：

両地域の人々は、近代が想定する強い個 / 疑似強い個である。何事も自分で考え判断する。欧米的にいうと進化する個人主義の人々である。

経済学者小野塚知二は近代社会を三つモデルに分類する。有機体モデル（organicist）・原子モデル（atomistic）・協同性モデル（association）である⁹有機体性モデルとは、近代の前の時代から存在したもので、予め定まった共同性を特徴とし、その共同性は変更もできなし、共同性から出たり入ったりという加入・脱退の自由がない。原子体モデルとは、予め存在しているのは個人であり、そこに個人はおのれの欲望を充足するために他者と契約関係に入り、市場（所有権と交換性）と政治社会（社会契約による国家の形成）の二つの共同性を形成する。協同性モデルとは、予め存在しているのは個人であるが、おのれの欲望をよりよくする充足す

るのみならず、他者の役に立ち他者に認められ、協同 (cooperation)・連帯 (solidarity)・友愛 (friendship)・互助 (mutual aid) などの諸価値を実現することができる。個人の自由と自己選択・自己決定が実現され一人ですでできないことも可能になる。シリコンバレーも深圳も予め存在しているのは個人であるが、深圳は原子モデル的であるが、シリコンバレーは原子モデルと協同性モデルが存在するが、社会としては限りなく協同性モデルに近いと判断できる。両地域の人々は、何事も自分で考え判断する、あるいは考え判断せざるを得ない境遇にある強い個である。欧米的には進化する個人主義の人々である。

日本との比較でいうと、中国は日本と異なり、場 (イエ・会社・地域) を基準とした社会秩序が形成されず、個人は非団体的存在である。個人は自立的で飛びまわる存在だが最終的には自分自身の同じ言葉 (方言の数も夥しい) でつながっている郷党及び苗字血縁でつながっている宗族と呼ばれる人的ネットワークによすがを求める。個が自ら独力で形成するグワンシ (人間関係) 社会であるといわれる。場があって共同性が生まれる日本社会とは根本的に異なる。彼らは個は根無し草となる覚悟 (ノマド性) の下に歴史を重ねてきており、自立する個の流動性は高く、競争や信賞必罰やダイナミズムに高い親和性を示すのである。

iv 出入り自由のよそもの社会、よそ者文化：

深圳もシリコンバレー同様、よそもの社会である。中国の戸籍制度の問題もあるが7、8割がよそものである。そのよそ者社会は、ベタベタした拘束的な人間関係ではなく、グラノベッタのいう弱いつながりを想起させる。人々はモビリティが高く独立心も旺盛でスピンオフも多く起業率が高い。“Once you are in Shentzen you are Shentzener”¹⁰ と声を掛け合うなど。独特の対等な仲間意識が形成されている。よそもの同志という関係性は平等・対等意識が強く、自由な競争社会を育くむことになる。

ほとんどがよそものであることから、平等・対等意識が強く、自由な競争社会を育んでいる。

v 伝統としてのトラスト手法/トラスト制度の存在：

強い個の背景に二つの異なる文明がある。全く異なる文明に、それぞれ営々として積み重ねてきたビジネス慣行があり、その社会にはトラスト形成の伝統も埋め込まれている。アングロサクソンの慣習法化した契約制度が明示されているのに対し、4千年の歴史の中で培われた中国の宗族の信頼構築の伝統・グワンシと呼ばれるネットワーク性が中国ビジネスの底流でトラスト形成を支えているように思える。

iiiの強い個のところでも述べた通り、強くなる個の背景にあるのが二つの異なる文明で生み出されてきたトラスト形成の伝統である。アングロサクソンの慣習法化した

契約制度、そして4千年の歴史の中で培われた中国の宗族/幫の信頼伝統・グワンシと呼ばれるネットワーク性が、現代でもビジネスの基盤として機能しているということだ。

vi 線分的に高速で流れる時間観念：

中世は時間が円環的に流れていたとされる。両地域の時間は今や線分的で高速で流れている。時間概念・時間感覚が他の地域とは著しい違いを見せる。テンポが速く、時間は未来に向けて一直線 (線分的未来の追求) で伸びていく。そのような意識で生きている人々である。ゆったりまったりして四季があつてまためぐり合わせるというような円環的感觉はない。個人主義の下時間は自己管理され、シリコンバレーでは dog year とか rat year などと時間のスピードを表現していたが、深圳では 724/929 (一週間7日24時間とか、朝9時から夜9時まで) とか Time is money. Efficiency is life であり、シリコンバレーの7倍のスピードと自負して慌ただしく、しかし楽しく仕事をしている。ムーアの原則が大昔シリコンバレーで生み出されたが、なお実感できる場所である。

vii 主体的に創り上げる仕事と人生：両地域の社会構造、働き方構造が日本とは異なる。独立独歩の企業家や企業を転々とする人々、そしてフリーランス的に生きる人々が多い。彼らには雇われないといけないという意識は低い。大企業、大組織になったテンセントでもスピンオフでやめる人、出戻りで帰ってくる人と目まぐるしい。人々は個性的に生きており若者の early retirement、NPO への転身など、日本人とは全く異なる人生に遭遇する。

みんなが自由に競争して助け合い、自ら自分の人生を創造している社会には「誰かがいづれ助けてくれる」といった甘えの発想は許されない。フリーライダーに居場所はないのだ。もちろん、人間としてのボランティア精神は旺盛で、民間企業での寄付の給与天引システムや週末のボランティア活動の通知など、市民社会として救済機能は見事なまでに自主的に実践されている。

III、イノベーションを生み出す社会の構造

ここでは社会構造という視点から、六つの領域を取り出し各領域毎にイノベーション社会としての論点を整理する。西洋文明が生み出した近代 (人工物でフィクションともいわれるが) という時代の地域社会の構図と中国の社会主義市場経済社会に生まれた深圳社会という現実を考察するということになる。

(1) 人材領域：ダイナミズムに立ち向かう強い個

欧米の人々は近代という社会を創造した。近代は欧米

産業社会が自らのダイナミズムを語るための自己表現だとされる（公文俊平）。近代というのはそもそもイノベーションを起こすための社会の創造ではなかったか。円環的に流れる静態的社会からのイノベーション社会への脱皮ではなかったか。中世のくび木から解放され人々はアントレプレナーシップという本性を覚醒させて自由に時空間的にはばたいていったのである。人々は孤独に耐え自律的に行動をする強い個を形成する。近代という時代にシティズンシップという行動原理も意識されるようになる。それに対し、中国の人々は度重なる異民族侵略により自らつくり上げたネットワーク（グワンシ）をよすがとして自力救済的に強かに野生のまま逞しく生き延びてきた人々である。彼らも強い自我・自立心をもつ人々であり、資本主義社会での激しさは半端ではないのである。彼らは動的で複雑系の世界にいるのであろう。

関連概念・用語

近代の個（リバタリアン度、個人主義度）、ポストモダン（再帰性、内省的、脱構築）、デザイン思考、プロジェクト主義、複雑系理論の個（適応性・高いエネルギー値）、人類史的な個別化/集団化、非団体的、個人主義/集団主義、奇人・変人、強い個・ノマド・よそ者、時間観念・線分的高速の時間観念・ムーアの法則、有機体性・アトム性（闘争的経済人）・アソシアティブ性（協同的結社的経済自発的経済人）、など

（2）モビリティ領域：意識と生き方が違う

複雑系の時空間はでこぼこを繰り返す適合地形が埋め込まれており、個は自動的に動的になる。西洋近代の人々は自由を渴望し自省的に自分自身の解体による変容力を持ち、適応力が高く、自分の人生を未来に向かって線分で合理的にみつめる。深圳の人々は、基本的に貨殖性が強く、信賞必罰を当然のこととしており、結果、経済合理的行動が得意に見える。非団体的で根無し草的行動をいとわない。地理的にも職場的にもモビリティの高い人々。終身雇用制度が定着する暇はない。

関連概念・用語

系・組織のオープン性、地域全体の人材の受け入れの程度（包摂性）、雇用制度（終身雇用・雇われない働き方・フリーランス）、知財管理体制と雇用の拘束性、組織文化（契約の束としての組織、法人擬制、集団凝集、排他性）など

（3）コミュニケーション・情報交換領域 明るくて洗練としてぶつかり合う社会

米国はメイフラワー協約で社会契約の先鞭をつけた。フランスの政治社会学者アレクシス・トクビルが18世紀の米国を旅してそのコミュニティに驚嘆・賞賛。アソシ

エーション社会が実現していた。シリコンバレーの人々はそのような人々の後継者としてこの地でさらなる理想的な市民社会を構想している。多種多様な贈与的コミュニケーションの場が数限りなく存在し、見返りを求めない無償の情報交換が展開する。同時に彼らは経済合理的な市場的コミュニケーションの場、つまり言い換えると自己利益（self-interest）的市場交換の場もまた無数に持っている。もちろん日常生活の贈与交換が時に経済動機に裏付けられた市場交換に転化することも多い。このような珍しい交換行為の中で確率論的にイノベーションに発展することが予想されるのである。最近ではアクセラレータという機構を発明するなどイノベーションにはとりわけ敏感である。要すれば、社会のネットワークが網の目状となり、いろいろなところで人々は交差する。そしてその都度交換が起こる。そのような重厚な社会を生み出しているのである。

他方、深圳の人々は、待ちわびていた資本主義社会に堰を切ったように極めて貨殖的な行動で対応する。その数は夥しく、どうすれば儲かるのかと言わんばかりにコミュニケーションが繰り返される。利益を指向する市場的情報交換に邁進するのである。自らを鼓舞するようにシリコンバレーを強く意識し、情報の回転数も凄まじく高速である。深圳にはネットワークに拘束性はなく、自由に情報が流れる環境が存在する。

関連概念・用語

贈与交換（日常生活における無償のコミュニケーション）/市場交換（ビジネスとして行われる情報の交換のことで自己利益として行為されるもの）、ブリッジング/ボンディング、マーク・グラノヴェッタのいう弱いつながり（weak tie）、コモンズ

（4）ビジネスの仕組み（法制度、ファイナンス、個に対する支援、ビジネス文化）領域：新陳代謝を促し、より良いものを追求する社会モード

シリコンバレーではアングロサクソンの英知の結晶として法の支配を正義としたゲームのルールを完成させている。法の柔軟な対応を可能にするコモンロー（慣習法）という漸進的新陳代謝が行われる法システムの上に、直接金融や投資文化を支える会社制度・会計制度が整備されている。

他方、深圳でのビジネスを支えるのは自由な商取引空間とそれを結果的にサポートすることになる後追的的政策立案や規制である。また、グワンシ文化・宗族関係などを背景とする歴史に裏打ちされた信頼の仕組みがある。またルールや基準がないといわれる中小企業群のビジネスにおいても実戦的なその場その場のデファクト基準（四現主義を詳しく現場・現物・現実・現金）でのゲー

ムのルールがあり、それはそれで現実的な納得的な約束事だとして機能している。すべてを通じた標準形がないように見えるが、個別的契約関係の集合体としての全体としては持ち寄り型の秩序が形成されているのである¹¹。アングロサクソンの洗練されたエクイティファイナンスに対し、深圳は極めて投資意欲（金儲け意識）の高い人々の資金が集まり（5万社のVCとPE、50兆円ともいわれる投資資金が存在した）、結果的にエクイティファイナンスが成立している。また、競争社会で活躍する個人を支えるシステムとして、シリコンバレーではカウンセラーシステムが、深圳では宗族ネットワークなどがその役割を果たしている。

両地域ともICT時代にふさわしいビジネス文化が形成されている。すでに述べたように、深圳の同朋意識（Once You are Shenzhener, you are here.）・時間観念（Time is money. Efficiency is life. 724, 929）は、シリコンバレーの自由でオープンでカジュアルという合言葉やマイルストーン管理される時間観念（Dog year, rat year）に通じるものがあり、先進地域としてのシリコンバレーでは市民の手で寛容・革新・サステイナブルという地域理念が起草されている。

関連概念・用語

法規制（アナキヤ的／慣習法的／ローマ法的）、権限の移譲性（中央集権／地方分権／補完性の原理）、起業活動性（アントレプレナーシップ）・市民性（シティズンシップ）・血縁性・地縁性、四現主義（現場・現物・現実・現金）、エクイティ（投資による対等で未来志向的の人間関係）・デット（主従的關係性）・委任／受託概念の普及・個のアカウントビリティ・コミットメント・コンプライアンス・中国的トラストの伝統、セラピー慣行・カウンセリング制度・グワンシ・宗族などによる信頼支援システム

(5) 精神・倫理基盤領域：トリガーを内在させる社会

自由で開放的な環境は人間の本性としてのアントレプレナーシップが行動の前面に現れて個の行動に火をつけている。また宗教的基盤についても、一神教が公共宗教にまで止揚され、市民社会として確たる精神基盤を創っている。彼らの資本主義精神（アクティブ・アスケーズ：利得の是認）の中で共通善を目指す人生観が底流に流れ、アカウントビリティ意識が高い（最後の審判の時の生の受託に対する神に対する責任ある説明を行う意識）。個人主義が深化し、人々はみんなのためにみんなはみんなのためにという旺盛なる受託責任（スチュワードシップ精神）を備えている人々が中核にいる社会である。万人のための大きなビジネスモデルを指向する。それは潜在意識に共通善を求めることの帰結である。シリコン

バレーのベンチャービジネスにはスケールすることが多いのである。

中国人は4千年の歴史で異民族の侵略を受けながら生き延びてきた人々である。儒教（公的信条といわれる倫理的伝統であり孔子廟も維持されている）を継承しつつ根無し草的グワンシ的強韌さを保持している。シリコンバレーも深圳も、実現可能な構成理念的な言葉と、実現できそうにないが美しい物語が語られている統整的理念が混在し、それが行動のエネルギー源となってる。西洋文明は宗教革命・市民革命をへて人間をよく理解し、人間を人権を軸に置く認識をしている。それに対し、中国は貨殖的功利主義的行動を基本として、中華民族の復興や習近平の一带一路などのイデオロギー的な言葉が彼らの後ろを押している。また個人データの利用についてはテクノロジーへの信頼が厚く、利便性・安全性の向上が顕著に目に見える形で実現している。それは生活功利主義のなかで許容されているともいえる。

関連概念・用語

信仰・信条・信念・心の糧、共通善、ムーアの原則、カリフォルニアンイデオロギ、アントレプレナーシップ、宗教（土着宗教、アニミズム、公的宗教・市民宗教）、鄧小平（先富思想・扶貧思想）の功利主義的平等主義（士庶構造に変化）、習近平信仰・崇拜、一带一路、イデオロギー、功利主義的行動、など

(6) 社会基盤領域：みづからが創り上げた歴史の厚み

東洋文明と西洋文明という切り口に関心がある。両地域とも世界を代表する人類史を歩んできた人々がつくる社会である。片や近代を生み出した人々であり、人々の個別化・個人主義・自由への渴望の方向に舵をとり、資本主義で世界を席卷した人々である。片やとてつもなく広くて大きくて多様な国を易姓革命という皇帝交代制度（悪政は天が転換させる）により統治し、東洋文明を牽引してきた人々である。いずれの社会も彼らの手で借り物でなく創造した重厚な社会が構築されている。経済活動の土俵はその一部であり、もちろんイノベーションが起るフィールドもその一部でしかない。人間は個別性的な側面と同時に集団性的な側面をもつ。シリコンバレーでは競争するが故に協同するという、リバタリアン的な側面とコミュニタリアン的な側面が同居する。その意味では近代と前近代が巧みに同居しているのである。

アングロサクソンの競争社会で生きるビジネスマンには家庭など癒し空間をきちんと個々人がシステムの構築している。社会学者見田宗助はルール圏というビジネスフィールドに対しそれに対峙する喜びと感動に満ちた交響圏（家庭やNPO）を設定し人はそれらを使い分けると説明している。個別的個人的激しい厳しい時空間と

は異なるコミュニタリアン的な集合的空間を準備しているのである。近代の孤独は、経済の場ではなく、家族でありコミュニティで癒されているのである。

中国はなお分析が不十分であるが、既述のとおりグワンシ文化・グワンシネットワークに代表される社会構造・社会規範が人のよすがとして存在している。自由と競争がもたらすいわばリベラルな緊張や孤独をいやすコミュニタリアン的な安堵の仕掛けを社会にそして家庭などに埋め込まれているのである。

シリコンバレーも深圳も人類史の長い歴史を積み重ねている。社会の構築についての幾多の埋め込まれた人類知が集積している。時代先端的な個の活動をしっかり社会が受け止める懐があるように見えてならない。米国で強い個の再生産のためのカウンセリングシステムを市場化し、またあまたのNPOが自由に設立され経済活動の補完的な役割を果たしているようにもみえる。

また、両文明とも、人々はナレッジや知恵をみずからの力で生み出し社会進化を遂げてきた。借り物でない自分たちのナレッジを営々と蓄積してきている。欧米の社会秩序は古代ローマ以来ヘレニズム世界を経てボローニャで完成した。偉大な歴史の産物、彼らの知の結晶である市民法大全・教会法大全が長い歴史の中で各地の大学に普及し承認され、厳然として欧州社会に存在している。彼らは常に人間とは何か、生きるとは何かを問い続け、人文学 (humanities) やリベラルエデュケーション教育を通じて哲学が生活に根差している。中国の場合も上層・下層の二層社会の秩序形成の知恵が数千年の歴史の中に蓄積されている。下層レベルとしての基礎集団が宗族であり、上層としての文人官僚がいる。この上層が政治と経済のシステムによって緩やかに下層を覆っている。上層には文人官僚がいて科挙により公平に地域から選抜される。選ばれた文人は下層の宗族に支えられる。二層はそれぞれ分立し、社会全体の組織化は緩やかな秩序を形成していた。官僚制を支配する原理は儒教であり、儒教は血縁の共同体内部の原理を醇化したものであったが、その醇化は高度なもので高い普遍性を持っていた。皇帝もこの原理の支配下にあり、その資格は世襲で保証されるものではなく有徳で天命を受けている限りにおいて帝国は存続した (『文明としてのイエ社会』村上・公文・佐藤)。

関連概念・用語

易姓革命・グワンシ本位社会 (土地・「イエ」本位社会ではない)・中華思想、自我と他者、自然と人間の関係 (分離)、執拗低音 (なり行くまま)、自然信仰 (アニミズム)、人間の個別性指向・集合性指向、浸透型・分立型、間柄、血縁的共同体原理の醇化としての儒教、能動主義・個人主義、ローマ法大全・市民法大全、リベラル

エデュケーション

7) まとめ

強い意志をもって人生に取り組む強い個が複雑系の「因子」となって経済のダイナミズムに挑戦する。多様に富む無数の「因子」は凄まじいスピードで「系」の中を動き回り、交換/経済活動としてのコミュニケーションを行い、シリコンバレーでは同時に贈与交換/社会活動としてのコミュニケーションを行う。それは、シュンペータの言う五つの結合をすべからず試すことになり、またドラッカーの言う七つの機会をあまねく捉えることにつながる。複雑系の言う創発現象に結び付く。イノベーションが起きるのである。彼らは人間の本性たるアントレプレナーシップを発揮し野生をむき出しにしてイノベーションに挑戦しているのである。

そして、彼らの活動を支える経済基盤があり、行動の火付け役になる精神基盤があり、安心・安堵を与えるよすがとなる社会基盤が存在する。さらには、その秩序を維持するガバナンスの仕組みが地域に組織に構築されているというべきなのであろう。

IV. 日本日本人についての考察

西洋近代の個、深圳の個の迫力。日本人にはなかなか難しい。なお、組織、社会の対応も違う。列挙すれば次の通り。

- 1、日本の地域経済社会について、シリコンバレー、深圳とはかけ離れている。すべての要素が異なる。
- 2、地域経済社会に関して、両地域のポンチ絵を作成した (図1、図2)。日本には同様の地域経済社会を描けない。
- 3、個においては、行動の論理の中で自由に動き回る人々に対し、なお江戸時代的な「よろしむべしらしむべし」の世界でいきているように見える。就職時の大企業志向は安心安定を金科玉条として求め、「大きなものにまかれろ」「表立って反対はしない。素直に従ったほうがよい」などとする服従の論理を生きる日本人が多い。上位の人に気を使い自分の行動を縛る村度文化。会話も行動も形式知にしないハイコンテクスト社会で見動きつかない。人間の本性のアントレプレナーシップやケインズの言う野生を抑制する。イノベーションは難しい。
- 4、新しい世界を創造するため、新しい世界にチャレンジするために自分を変えるあるいは自分が動き回って適応しようとするような行動の構図が観られない。疑問を発し、仮説検証し、自分自身もつねに内省する、近代の個、ポストモダンの個と

は程遠い。

- 5、競争することよりかばい合うことに価値を置いてしまう人々、情報の交換交流というイノベーションのための基本動作が乏しい。どうしても狭い世界の義理の世界での交流にとどまってしまう。同調圧力に勢力を削ぐことになり、新しい奇抜な発想や新しい組み合わせに気持ちが向くことが少ない。何かをするときは、みんなですり合わせ、チェックポイントはよこ並びそして前例である。
- 6、社会の制度が新陳代謝を促進するものとはいえない。いかに現状を維持するかに力点が置かれている。明治維新時後、戦後も司法による新陳代謝が図れる英米法との乖離はいかんともしがたい。深圳のように新興国、日本の戦後の混乱期のような法支配のおおらかさはない。勤勉でまじめで優秀で水をも漏らさぬ官僚制度では時代に対する弾力的対応は望むべくもない。
- 7、米国のような野球の三振振り逃げを称賛し人間としての行動力を称揚するような社会のバックアップはあまり見られない。まじめにヒトのことをよく聞いて変なことをしないでという行動論理を叩き込まれている。

V. 課題

本論考は未定稿である。なお次の論点の検討を始めている。

(新制度学派青木昌彦の指摘)

新制度学派の泰斗青木昌彦が『比較制度分析に向けて』でシリコンバレーについて「不確実で高度に多様で複雑なシリコンバレーのようなハイテク産業地域社会については、制度分析の要素関係性の定式化では全体を把握できない」と指摘していた。その指摘を踏まえて、複座系理論を当てはめながら、それはホリスティック分析することでもあるが、両地域の分析を次回に展開してみたいと考えている。

(技術進歩のスピードと情報共有の問題)

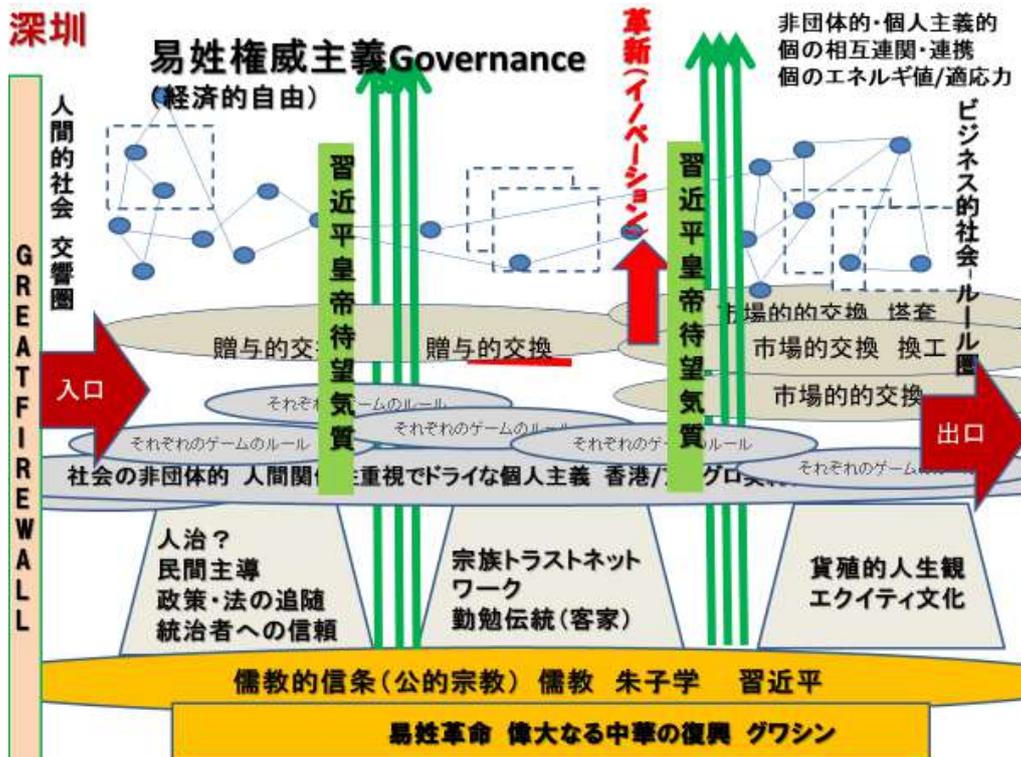
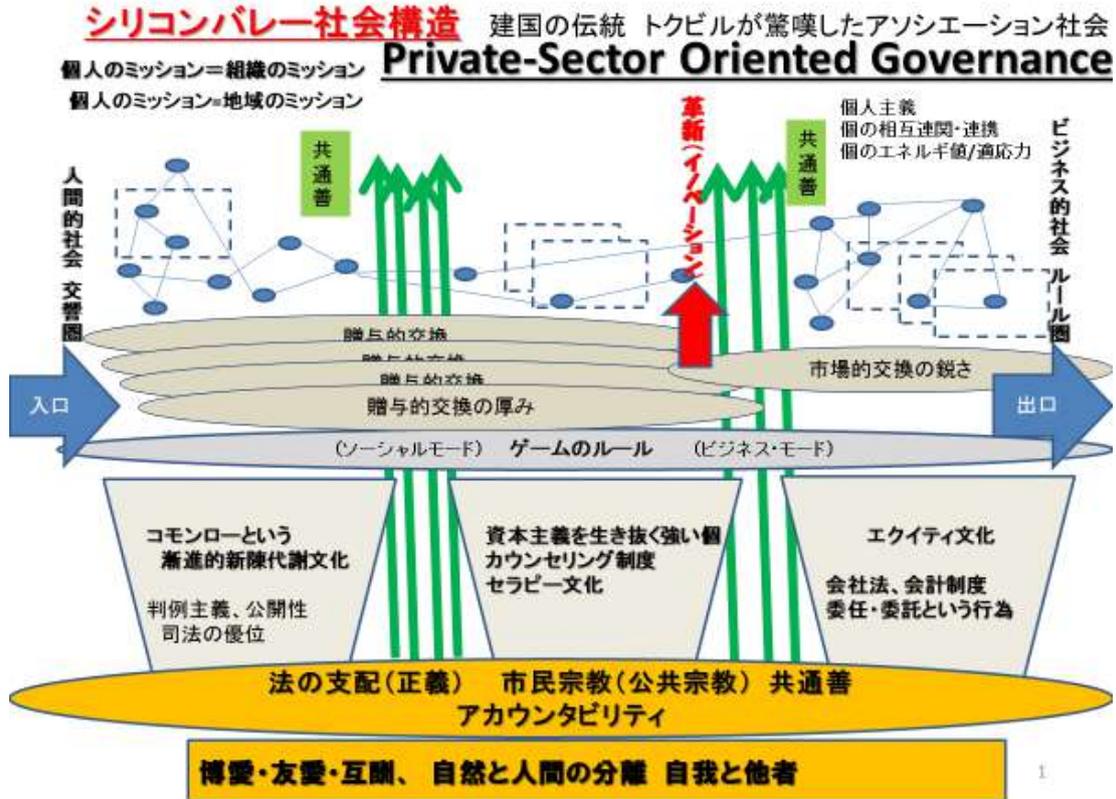
シリコンバレーは自由を求めるアントレプレナーの究極の地域社会を創成した。そして、シリコンバレーはICT産業のモデル地域として世界をけん引した。1990年代の半ばから2010年。その時代はインターネット革命がはじまり、ヤフー、マイクロソフト、グーグル、アップル、フェイスブックなどテックジャイアンツの草創期であり、AIが視野に入りつつあった。一方で、シリコンバレーは市民の手で衰退した地域社会の再生のための運動が起こり、地域がまとまり行政機関の代替物として調査・把握・議論・策定を実践する統括機関、JV:SVNを誕生

させた(毎年地域白書の作成・報告と問題提起)ことも事実である。危機にあったこの時代、地域のあちこちで火の手が上がる。地域社会全体が胎動した。シリコンバレーは、折からの凄まじい技術進歩に身を置くことになり、結果的に地域経済社会として情報共有する文化を創成、同時に収穫逓増モデルを駆動させて、特段の優位性を披歴することになった。しかし、そこに厳然として欧米経済文化の共通善を中核に据えた知識人が存在し知識社会があったことは特筆すべきである。この地域特有のコモンズ(公共圏)を形成し繁栄を謳歌したともいえない。シリコンバレーが、そしてそれを模した深圳が地域経済社会としてどのような構図にあったのを確認する必要性を感じている。すでに作成したポンチ絵による説明を行いたいと考えている。

(日本の地盤沈下とナッシュ均衡の崩壊、そして日本の展望)

「人口減、高齢化、社会保障の綻び、莫大な財政赤字、金融政策は可動域を失い、円はたたき売られ、それでも海外から輸入せざるを得ない食料とエネルギー。そして物価は上がるが労働市場が弱体化し、賃金と年金は下がり続ける。これこそが失われた30年の正体ではないか」

これは立憲民主党の小川淳也幹事長の国会質問の一部である(日経新聞2024年12月16日)。日本の現状を見事に活写した。日本の凋落が著しい。八方ふさがりの厳しい状況にある。ただし、失われた30年の間、頑健な雇用制度が崩れなかった。しかし、このところその崩壊の兆しがみえる。学問的にはナッシュ均衡(経路依存性の罫)の崩壊が予見できるようになってきた。ナッシュ均衡とは、たとえば、日本の労働市場を例に引くとすれば、参加者の1人が、最も合理的な行動をとっても、その状態が、参加者すべてに最も理想的(経済学での最適状態)となるとは限らない。他の人が終身雇用ルールに従っている限りは、自分も終身雇用と言うルールに従うのが最善とする社会的均衡行動をとる。そのような社会通念が崩れつつある。朗報である。その件についてももう少し、シリコンバレーと深圳をモデルとしてコメントしたい。



注

- 1) 『第四次産業革命』日本経済新聞社 2016
- 2) 新結合と命名、のちにイノベーションという言葉を使用
- 3) 『資本主義・社会主義・民主主義』1924
- 4) アントレプレナーシップとは日本語では起業家活動・起業家精神と訳されることが多い。
- 5) 投機的な商人は projector として認識していた。
- 6) 評価測定の困難さ・時間の消費・イノベーション実践に対する抵抗など
- 7) 『イノベーションとアントレプレナーシップ』
- 8) 小門『アントレプレナーシップとシティズンシップ』2012
- 9) 小野塚知二『経済史』2018 有斐閣
- 10) 潘燕萍氏資料
- 11) 寺田浩明『中国法政史』

<参考文献>

- 青木昌彦『青木昌彦の経済学入門—制度論の地平を広げる—』ちくま新書 2014
青木昌彦『経済システムの進化と多元性』東洋経済新報社 1995
ダグラス・ノース『制度・制度変化・経済成果』晃洋書房 1990
Douglass C. North Structure and Change in Economic History 1981
ダグラス・ノース『経済史の構造と変化』日経 BP クラシックス 1981
C・ハムデンターナ、A・トロンベナルス『七つの資本主義』日本経済新聞社 1997
ブルーノ・アマール『五つの資本主義』藤原書店 2005
ミシェル・アルベール『資本主義対資本主義』竹内書店新社 1996
G. ホフステード, G. J. ホフステード『多文化世界』2013 有斐閣
バトリック・フリデンソン(著), 橘川 武郎(著)『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』東洋経済新報社 2014
ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス』(上) 河出書房新社 2018/ 9
- (複雑系・地域経営・クラスター・動態社会・イノベーション関連)
ジョセフ・シュンペーター 中山伊知郎・東畑精一訳『シュンペーター 資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社 1995
塩野谷祐一『シュンペーター的思考』東洋経済新報社 1995
カール・ポランニー『経済と文明』ちくま学芸文庫 1981/2004
カール・ポランニー『経済の文明史』ちくま学芸文庫 1975/2003
マイケル・ポランニー『暗黙知の次元』ちくま学芸文庫 2003
池本正純『企業家とは何か』八千代出版 2004
今井賢一『創造的破壊とは何か 日本産業の再挑戦』NTT 出版 2008
森嶋通夫『思想としての近代経済学』岩波新書 1994
山之内靖『ニーチェとヴェーバー』未来社 1993
根井雅弘『20世紀をつくった経済学—シュンペーター・ハイエク・ケインズ—』ちくまプリマ新書 2011
高城和義『パーソンズウェーバ』岩波書店 2003
村上淳一『システムと観察』東京大学出版会 2000 年
渡部亮『アングロサクソン・モデルの本質』ダイヤモンド 2003
原田誠二『ポータ・クラスター論について—産業集積の競争力と政策の視点—』『長岡大学 研究論叢』第7号 2009
笹倉秀夫『法哲学講義』東京大学出版会 2002
西垣通『デジタル・ナルシス』岩波現代文庫 2008
井上智洋『純粹機械化経済』日経新聞社 2019/5
池上英子『自閉症という知性』NHK 出版新書 2019/ 3
尾原和啓 藤井保文『アフタデジタル』日経BP 2019/ 3
アレックス・ベントランド『ソーシャル物理学』草思社 2018/10
ピーター・バーガー/トーマス・ルックマン 山口節郎訳『日常生活の構成—アイデンティティと社会の弁証法』新曜社 1962
吉野貴好「複雑系と社会」『地域政策研究』(高崎大学地域政策学会) 第6巻第3号 2004
筒井淳也『制度と再帰性の社会学』ハーベスト社 2006
西口敏宏・辻田素子『コミュニティキャピタル論』光文社新書 2017/12
亀田達也『モラルの起源』岩波新書 2017/3
坂本治也『市民社会論』法律文化社 2017/2
西谷修『アメリカ異形の制度空間』講談社メチエ 2016
後房雄『NPO は公共サービスを担えるか』法律文化社 2009
小山勉『トクビル』筑摩書房 2006

(中国関連)

- 深圳大学管理学院 2018/2 潘燕萍 pyp@szu.edu.cn “Shenzhen: A House of Innovation & Entrepreneurship”
須山卓「華僑社会における幫派主義と経済」長崎大学研究年報 1975
近藤大介『二〇二五年日中企業格差』PHP 新書 2018/9
梶谷懐『中国経済講義』中公新書 2018/9
梶谷懐・高口康太『幸福な監視国家・中国』NHK出版新書 2019/8
マイケル・ユシーム、ハビール・シン、ネン・チャン、ピータ・カベリ『チャイナ・ウエイ』英治出版 2019/5
橋玲『言ってはいけない中国の真実』新潮文庫 2018/4 (2015 週間ダイヤモンド連載)
田中明彦「貿易戦争から「新しい冷戦」へ」中央公論 2018/11
大沼保昭『国際法』ちくま新書 2018/12
此本臣吾監修 森健・日戸浩之『デジタル資本主義』東洋経済 2018/5
阿南友亮・江藤名保子「中国共産党政権と日本」経済教室 20180524 & 25
伊藤亜聖「加速する中国イノベーション」やさしい経済学 2018/3/20~29
矢吹晋『中国の夢』花伝社 2018/3
足立啓二『専制国家史論』ちくま学芸文庫 2018/2
藤岡淳一『ハードウェアのシリコンバレー深圳に学ぶ』インプレス 2017/11
アーサー・クローバー / 東方雅美訳『チャイナ・エコノミー』白桃書房 2016
丸川知雄『経済大国化の軌みとインパクト』東大出版 2013
丸川知雄『チャイニーズドリーム』ちくま新書 2013
丸川知雄『現代中国』有斐閣 2015
与那覇潤『中国化する日本』文芸春秋 2011
阿南友亮・江藤名保子「中国共産党政権と日本」経済教室 20180524 & 25
小野塚知二『経済史』有斐閣 2018/3
安藤馨「統治理論としての功利主義」日本法哲学学会 2011/11
安藤馨『統治と功利』勁草書房 2017
足立啓二『専制国家史論』ちくま学芸文庫 2018/2
藤岡淳一『ハードウェアのシリコンバレー、深圳に学ぶ』インプレス 2017/11
松本國義『華南経済圏—近代化中国と華僑—』Jetro 叢書 1992
M. フリードマン『東南中国の宗族組織』弘文堂 1991
石川好『中国という難題』NHK 出版

(中国：雑誌記事など)

(source : http://www.sz.gov.cn/cn/zjsz/gl/201708/t20170824_8237780.htm)

- 「デストピアからの悲鳴—脅える 1100 万のウイグル族—」日経ビジネス 20181112
「拡大する中国ニューエコノミー」DBJ 2018/5
「米中危機」エコノミスト 20180529
「中国・深圳の製造ベンチャー誕生の背景と今後の展開」三井物産戦略研究所 2017/3
ウエッジ「中国 大衆創業・万衆創新」2018/3
IDE JETRO「中国：深圳のスタートアップとその後のシステム」2016/11
エコノミスト「爆速イノベーション 中国の技術」2018/3/20

(深圳出張訪問先：(2018年2月7日8日)

- <日系電子機器メーカー / 電子部品商社 / ものづくりベンチャー / 深圳大学 / 華強北インキュベーターなど>
深圳大学管理学院 研究員
一帯一路研究所 所長
電子部品専門貿易商社 社長
ジェネシスホールディング 社長
ベンチャー企業 アラシ WEBANK 担当者
前海首潤投資管理有限公司 董事長 総経理他
深圳海王集団董事長 総裁 平安元書記他

以上